

# クラウドの向こう側

いまITのキーワードを問われれば、間違いなく「クラウドコンピューティング」（以下、クラウド）があげられるだろう。クラウドという言葉が登場したのは2006年のことで、いまではテレビのコマーシャルでも聞かれるほど一般的になった。クラウドがその名のとおり雲のようなものだとしたら、その向こう側にはどんな世界が広がっているのだろうか。クラウドの先にあるITと社会の姿について考えてみたい。

まず、企業の情報システム部門とその周辺がどう変わるか、仕事の進め方、システム形態の両面から見てみよう。

クラウド化が進むと、ITの利用部門と情報システム部門の関係が変わる。情報システム部門の役割が、利用部門の要請を受けてシステムを開発することから、サービスを活用して機能を実現することへと重点が移ってくるからである。

情報システム部門は、「クラウドで提供される機能で十分か」、「自社に最も適した機能を提供しているクラウドはどれか」という観点で検討することに加えて、「クラウドで提供される機能を活用するためには業務をどう改善すべきか」といった業務コンサルティング的な活動を求められるようになる。情報システム部門は、これまでの受身的な立場から大きくジャンプすることを求められるわけである。

仕事の内容もさることながら、仕事のやり方も変わってくる。クラウドでは業務の機能をサービスとして利用できるため、情報システムの構築における開発業務の比率は低くなる。IT部門や開発子会社において開発業務を内製化している企業では要員が余ってしまうだろう。社員のスキルチェンジを進めないとIT部門内失業が発生する恐れも出てくる。

「所有から利用」、「特化から汎用」という考え方が定着すると、システムに対する考え方も大きく変わってくる。企業の競争力に関わらないノンコア領域でのクラウドの活用が効果的なのは疑う余地がない。従って、企業内ITの生命線は、競争力に影響を及ぼすコア領域のシステム構築をどうするかにかかってくる。

この点で、クラウドの時代には、日本では遅れている「アジャイル（俊敏な）開発」の取り組みが重要になる。欧米流のアジャイル開発には異論もあると思われるが、筆者は日本流にアレンジされたアジャイル開発はやはり有効だと考えている。パートナーの選定時にも、スピードを意識した開発スタイルの視点を導入する必要がある。

今日のシステムは、異なるアーキテクチャから成る複数のシステムの組み合わせの形で構成されていることが多く、全体として合目的性を維持することが難しくなっている。クラウドやアジャイル開発を導入する場合、事



前に明確な青写真を描いて企業システムの方向性を明確にすることが必要である。その上で、青写真に描いた全体のアーキテクチャを維持できるシステムの枠組みを作ることが重要になる。

次に、社会の姿、社会とITの関係はどうだろうか。変化という観点からいえば、異分野の仕組みが連携するようになったこと、膨大なデータの蓄積・活用が人の生活スタイルを変えていることがあげられる。

異質な仕組みの連携の代表例は「スマートシティ」である。例えば、交通と電力は深い関係があるにもかかわらず、従来は別個の仕組みで管理されていた。スマートシティは、これを統合的に管理して利便性の向上や効率化、環境負荷の軽減などを図るという考え方である。日本では神奈川県横浜市や愛知県豊田市などで実験が始まっている。

スマートシティの実現にはインテリジェントデバイス、高速なネットワーク環境、高度なデータ処理などが必ずである。すなわち制御情報や保守情報を相互にかつ高度に活用して相乗効果を発揮させることがポイントである。そのとき、情報システム部門は社内外や地域をつなぐコーディネータとして機能することを期待されるのではないだろうか。

膨大なデータを消費者の行動に還元する代表例はカスタマーエクスペリエンス（顧客経

験価値）の提供である。消費者の行動特性をデータ化し、このデータを処理して消費者にサービスを提供する活動を指す。

身近な例としては携帯電話を使ったサービスがある。多くの3G携帯電話にはGPS（全球測位システム）モジュールが内蔵されており、所有者がどこにいるかを把握することが可能になっている。携帯電話は個人の行動履歴を常に把握できるわけで、その情報をマイニングすれば個人の行動を先読みすることもできる。そうすれば、日本人が得意とする“おもてなし”のサービスを携帯電話で提供することもできるようになる。

また、消費者がインターネット上に残す膨大な量の情報と企業のマーケティング情報を結び付けることにより、これまでのCRM（顧客関係管理）システムでは実現できなかったサービスも可能になる。新発想のサービスは企業の古い殻に閉じこもってでは創造できない。デジタルネイティブ世代の自由な発想を生かすために柔軟な組織を作ることが企業の課題となるだろう。

クラウドは、これまでのITの常識を超えた世界といってよい。こうしたITの進化は、ユーザー企業のIT人材に求められるものも変えていく。ITが社会を動かす力をますます強めようとしているいま、IT人材に求められるのは、あるべき社会に向けた柔軟な発想力である。 ■